

はじめに

今号にこのテーマを選んだのは、私自身、温泉が好きであることに他ならない。最初のきっかけは、大学生の頃に関西有数の温泉地である城崎温泉に行ったことだった。そこで外湯巡りに出会い、温泉にこのような楽しみ方があるのかと衝撃を受けたのを覚えている。それ以来、旅行となると必ず温泉を組み込むほど温泉に行くことが増えた。

日本には、火山が多く各地に温泉が存在し、温泉の数は全国に3,000近くあるとも言われている。日本人にとって温泉はそれほど身近な存在なのである。ここ愛媛県にも全国に名を馳せる道後温泉があり、それ以外にも30以上の温泉が県内各地にくまなく点在している。それぞれの特徴は当然異なっており、地域住民にとって憩いの場もあれば、観光地としての中心的役割を古くから担っているところもある。

歴史を辿ると、温泉に湯治の効能があると認められてから湯治旅行が盛んに行われるようになり、その結果、温泉の周囲に宿泊施設が建ち並び、温泉街を形成するようになったと言われている。高度経済成長期からバブルの時期にかけては団体旅行が盛んになり、団体客向けに旅館等の大型宿泊施設が多数作られ賑わっていた。しかし旅行形態が変化し、個人旅行が主流となってくると、かつて温泉街として賑わっていたような地域では温泉の衰退とともに、街全体が衰退するところも増えている。ただ現在でも、温泉が核となることで、地域に観光関連の宿泊施設や飲食店等の施設増といった恩恵をもたらすなど、経済波及効果は大きい。道後温泉の例を挙げると、2019年のデータでは約300億円の効果が認められており、コロナ禍により効果は大幅に減少したものの、2024年には本館が改修工事を経て全館再開し、さらにインバウンド需要もあって、今はコロナ禍前まで増えていると言われている。

タイムパフォーマンスが重視される現代、「風呂キャン」等の言葉も流行するなどお風呂から離れる風潮が散見される。しかし、ひとたび温泉地に行けば、日頃の喧騒から離れられ、日常では味わえないゆったりとした時間を過ごすことができ、そういった街全体の雰囲気を見直し、温泉を中心とした新たな街の活性化を模索する若者たちの動きも増えている。

本号においては、温泉とまちづくりについて「観光」を軸に取り上げた。全国で温泉を中心とした地域活性化に取り組んでいる方々の取り組みを取り上げ、まちづくりとしての温泉観光の新しい形を探っていく。温泉地を単なる日常の疲れを癒す場ではなく、普段体験することのできない非日常の「ハレ」の日を体現する場所と捉え、それが地域においてどのような影響を与えているのか、今後地域に根差す文化である温泉をうまく活用し、街を活性化させていく手法とは何かを考えるヒントとなれば幸いである。

(アドバイザー 植田 祥健)

